

3.2 河川に生息する生物の確認状況（河川の自然度・健全度）

ここでは河川に特有な環境に生育する群落の確認状況の整理等を行いました。なお、前回調査（3巡目）との比較は、調査の範囲や時期、回数などの条件が必ずしも同一ではありません。また、限られた季節や場所にしかみられない種もあることから、比較結果は同一河川での消長を示すものではなく、傾向を把握するための参考です。

【河川敷の変遷】

(植物調査)

- **25 河川中 13 河川で木本群落が増加**

河川環境基図作成調査の結果をもとに、河川敷を木本群落、草本群落、自然裸地、その他、開放水面の5つに区分し、河川敷の状況の変遷について整理しました。

今回とりまとめを行った36河川の平均では、河川敷は面積にしておよそ木本群落15%、草本群落24%、自然裸地7%、その他19%、開放水面36%で占められていました。

前回調査（3巡目）から今回（4巡目）調査にかけての変遷を25河川についてみると、河川敷で木本群落の占める割合が増加したのは、13河川でした。

(資料掲載: 3-47～52 ページ)

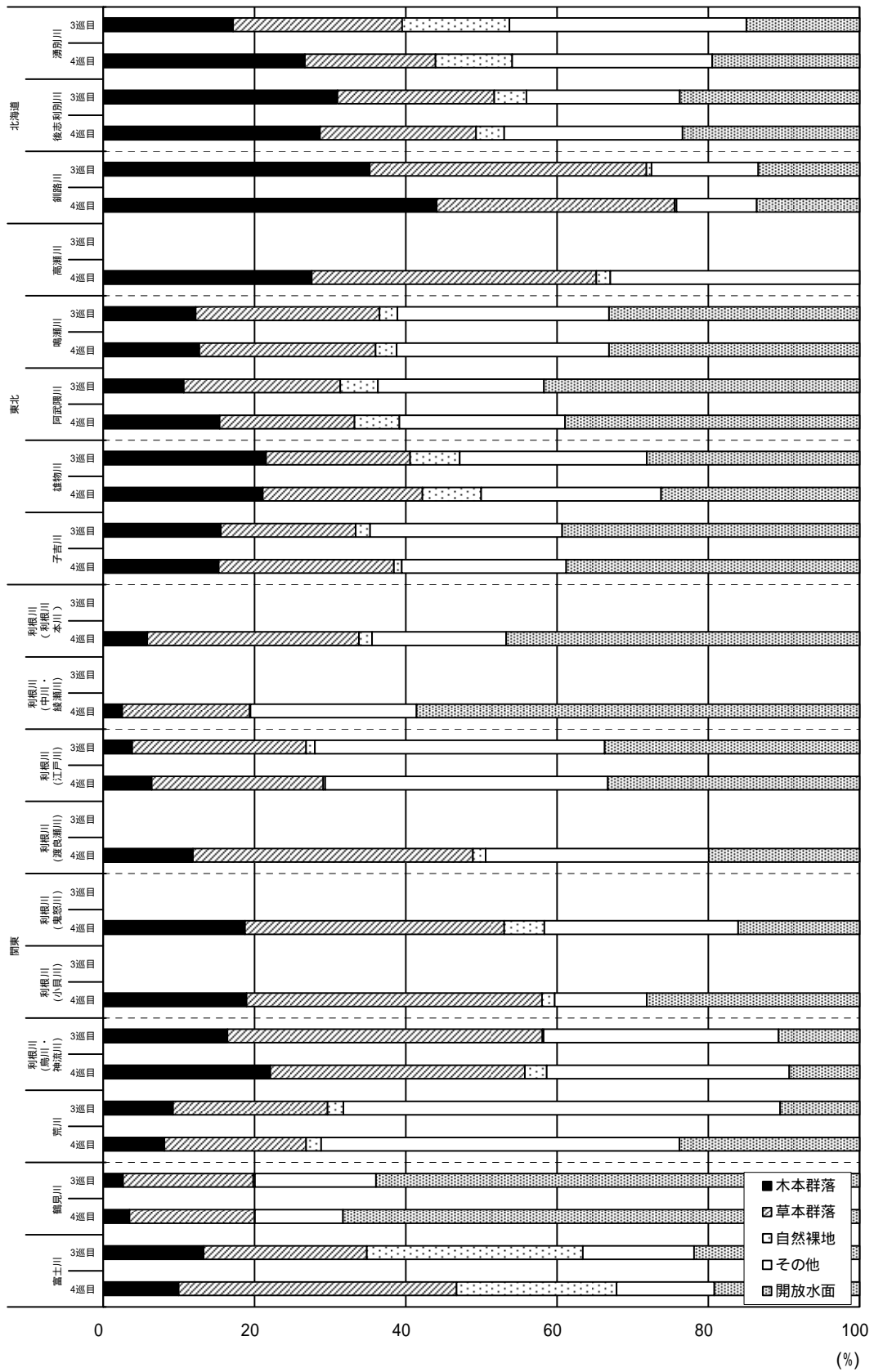
近年、河川敷において植生が著しく繁茂する樹林化の現象が進み、河川管理上の懸案事項となっている箇所が少なくありません。

ここでは、植生図作成調査の結果をもとに、調査対象面積を木本群落、草本群落、自然裸地、その他（畑、水田、人工草地、人工裸地、公園・グラウンド等）、開放水面の5つに区分し、河川敷の状況の変遷について整理しました。

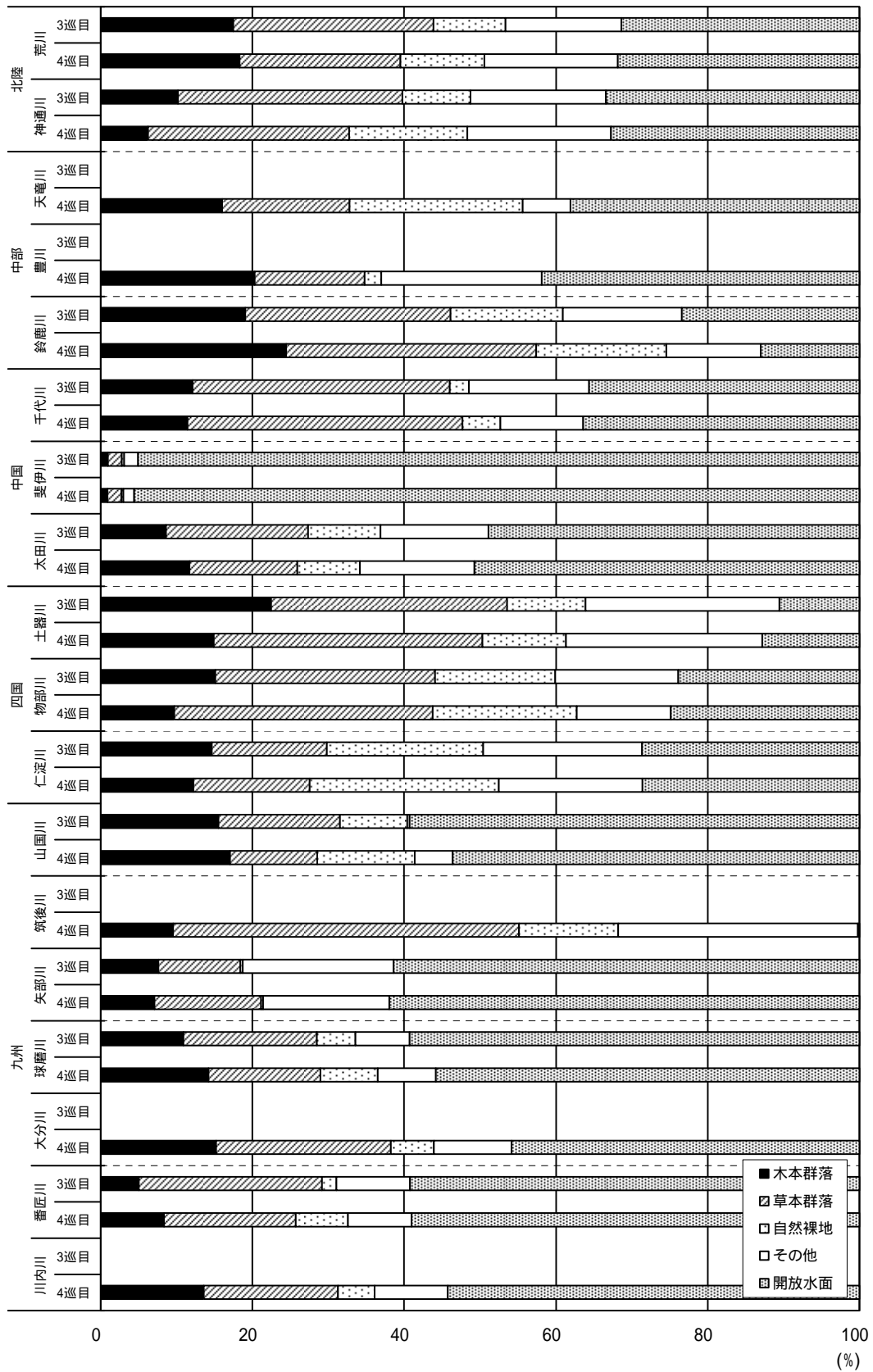
今回とりまとめを行った36河川の平均では、調査対象面積は木本群落15%、草本群落24%、自然裸地7%、その他19%、開放水面36%で占められていました。

前回調査（3巡目）から今回調査（4巡目）にかけての変遷を25河川について比較すると、13河川において、木本群落の占める割合が増加していました。また、木本群落の占める割合が増加していない河川においても、樹木の高木化などが生じている可能性があります。河川の樹林化についてモニタリングを継続することが必要です。

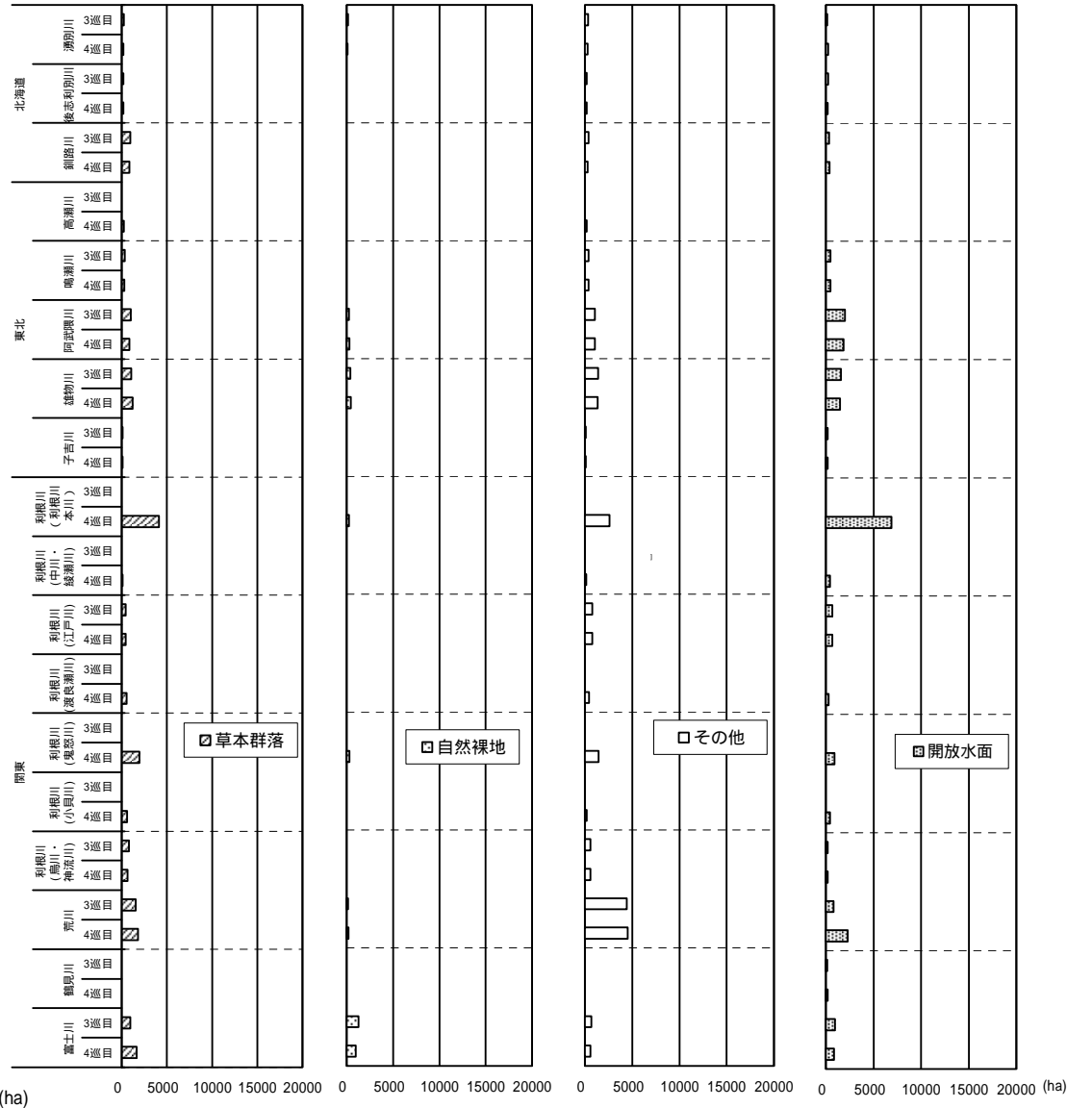
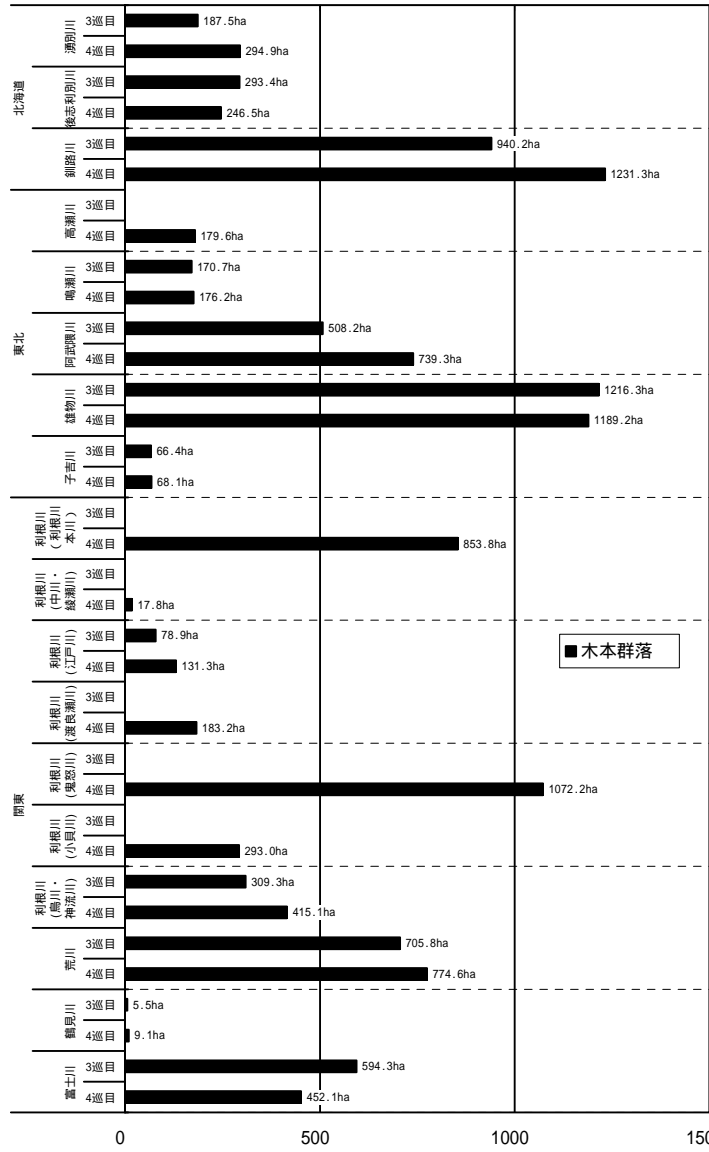
:調査対象面積とは、植生図作成調査における調査対象範囲の面積を示す。なお、前回調査（3巡目）から今回調査（4巡目）にかけての変遷をみるにあたり、一部、水系ごとに年度間でとりまとめ対象河川及びその範囲（距離）の調整を図っている。



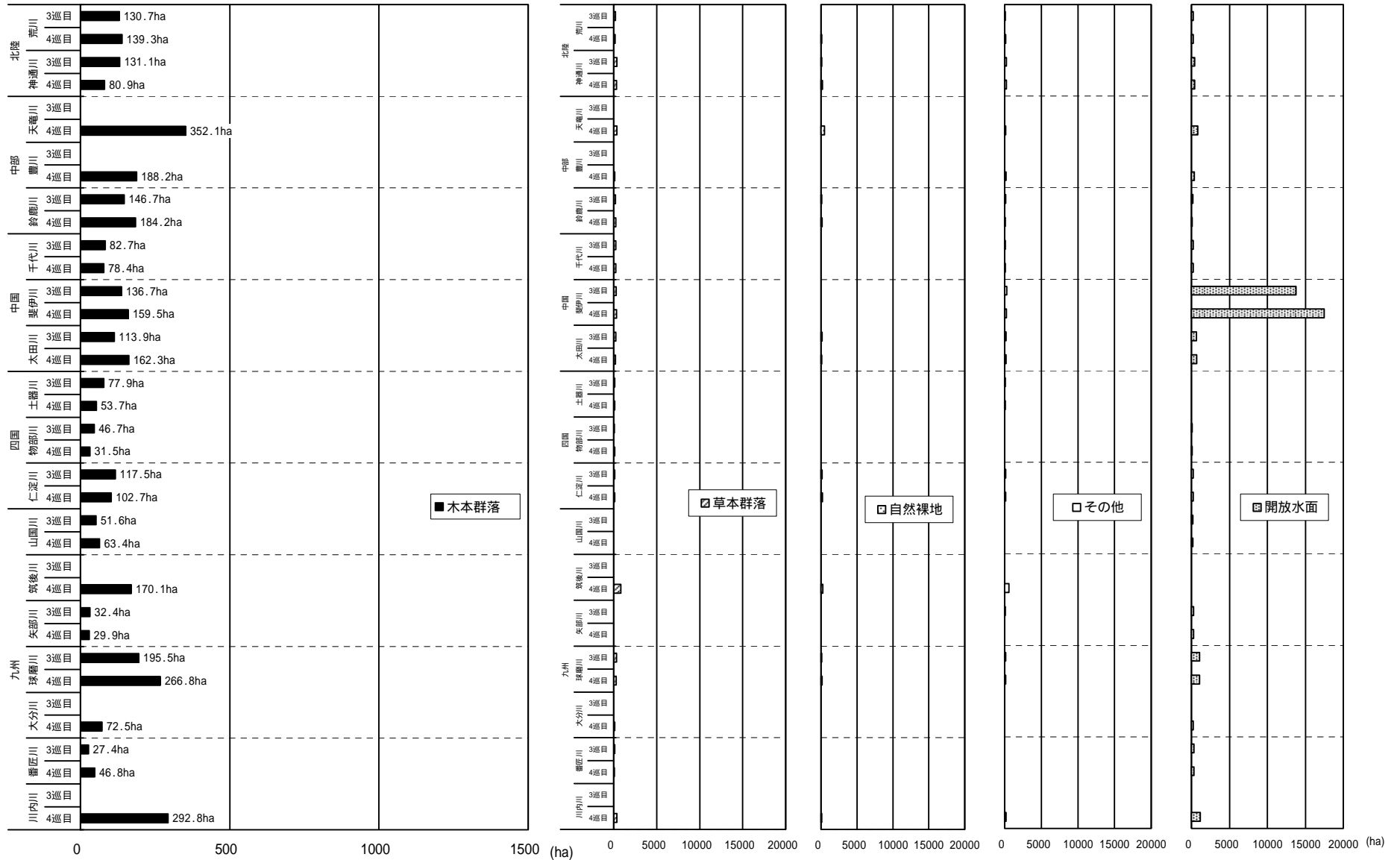
河川敷の状況の変遷(%)



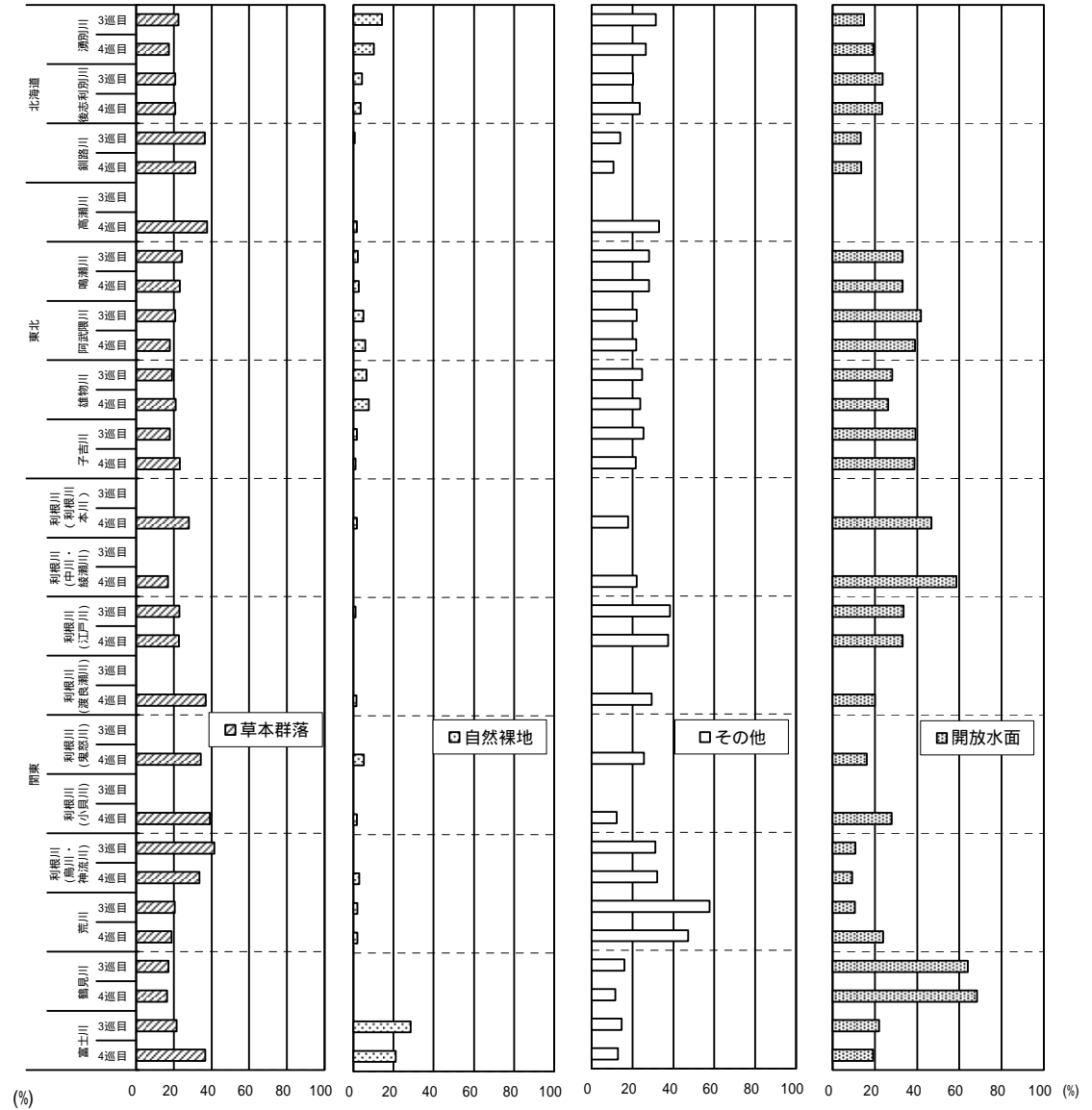
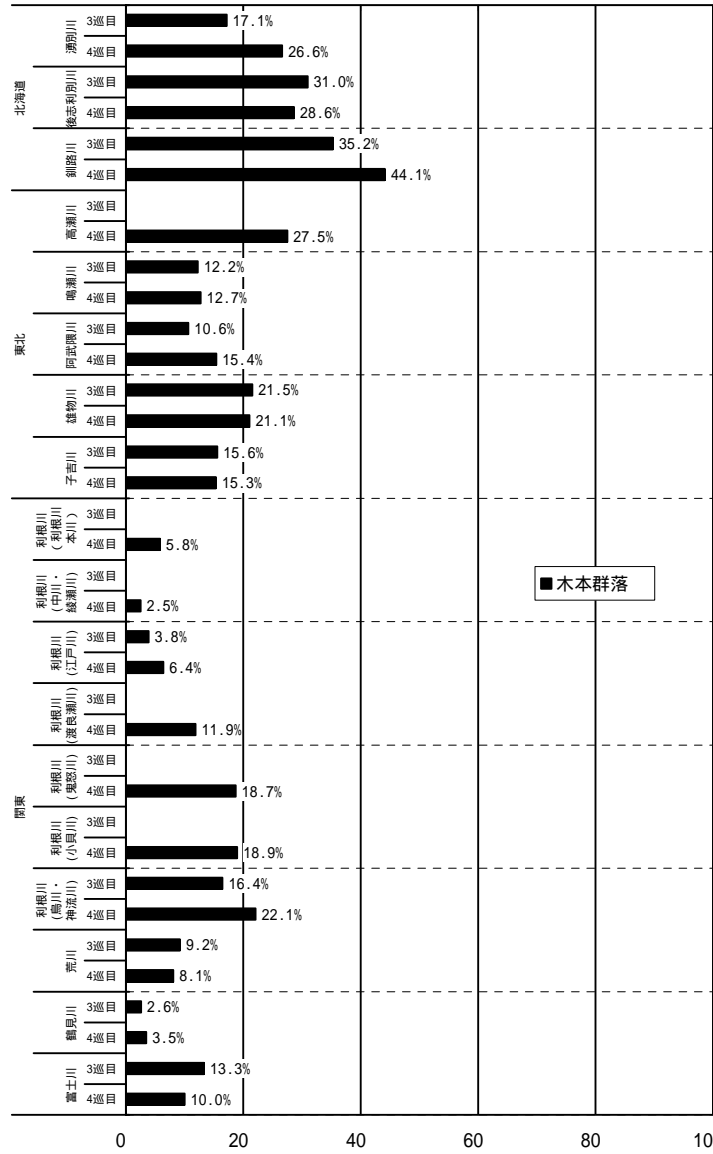
河川敷の状況の変遷(%)



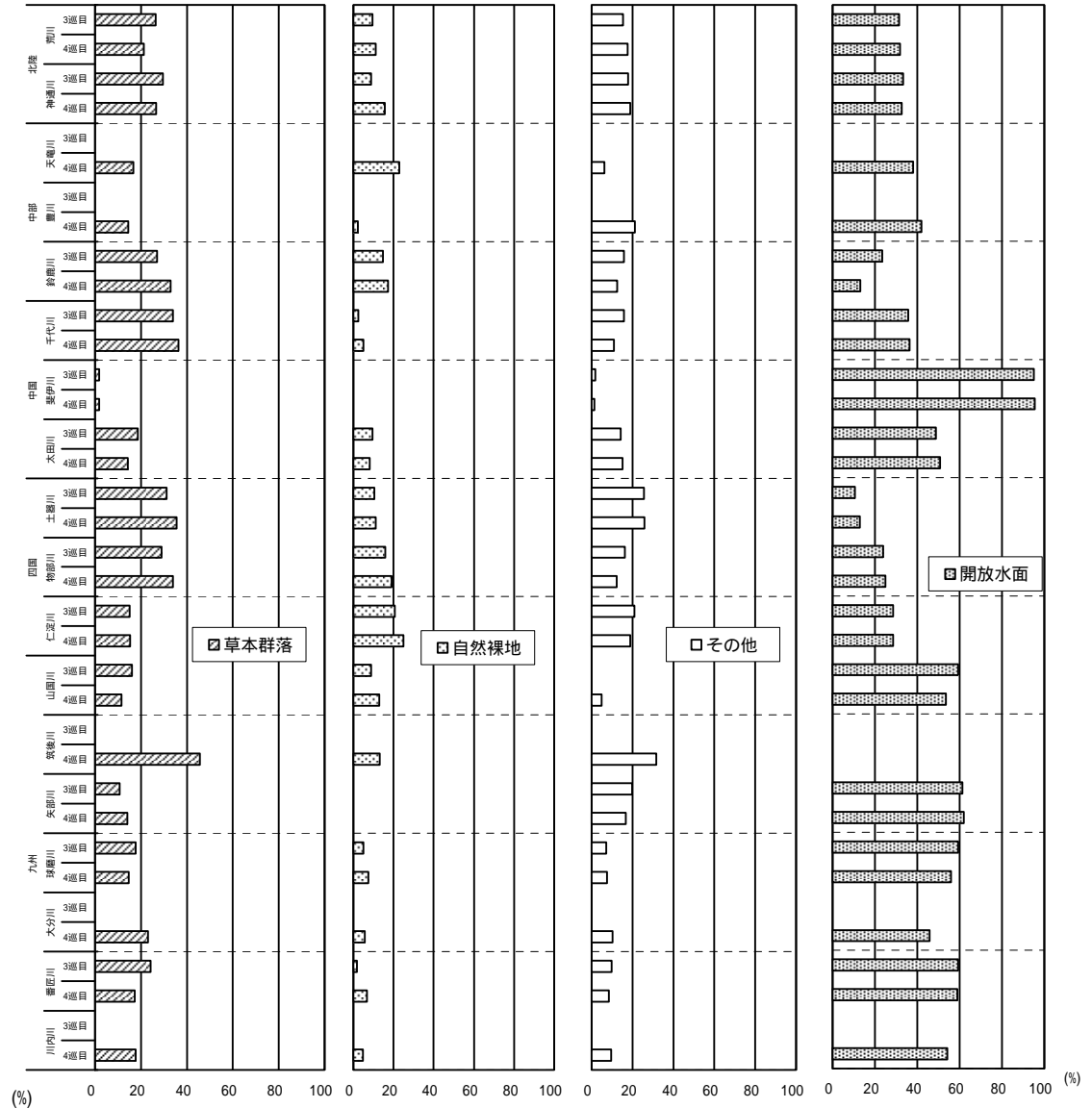
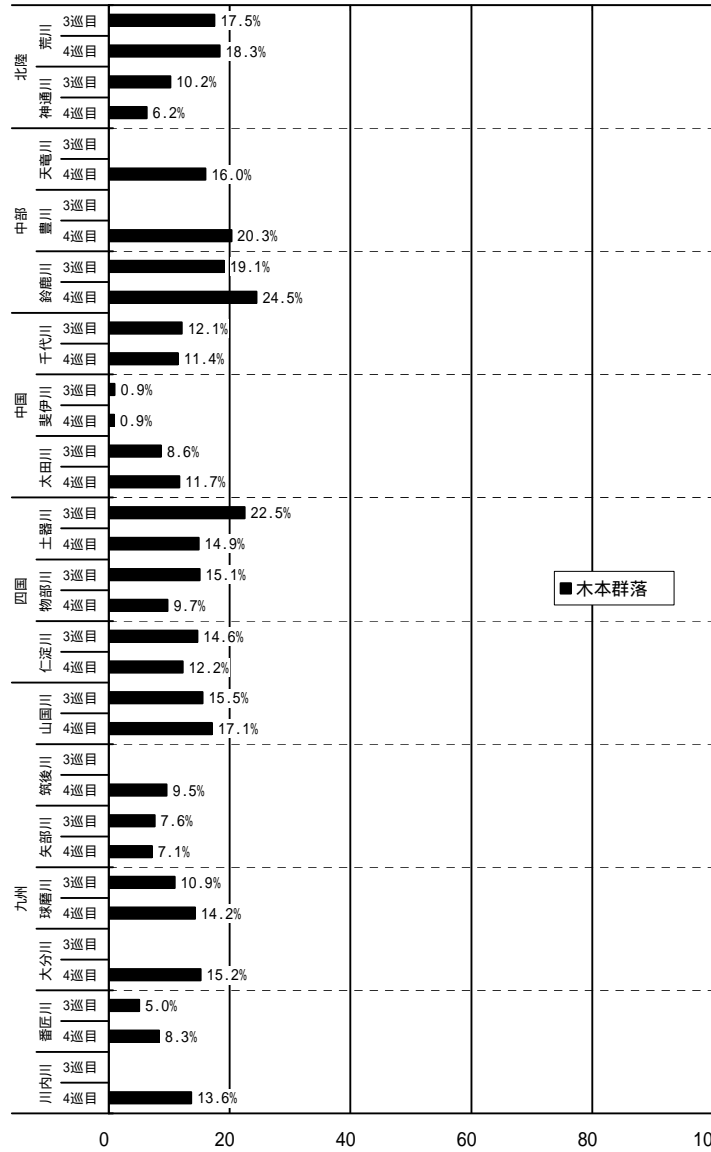
河川敷の変遷(ha) 区分別



河川敷の変遷(ha) 区分別



河川敷の変遷(%) 区別別



河川敷の変遷(%) 区別別

• 自然樹林と、外来種樹林および植林地が共に増加傾向

河畔の樹林を自然樹林と、外来種樹林および植林地に分類し、それぞれの分布面積を整理しました。

樹林化の傾向がみられた 13 河川のうち、11 河川で自然樹林と外来種樹林および植林地の調査対象面積に対する構成比が共に増加しました。

河川敷の樹林化には、自然樹林と外来種樹林および植林地の両方が寄与していることが伺われます。
(資料掲載: 3-54 ~ 3-57 ページ)

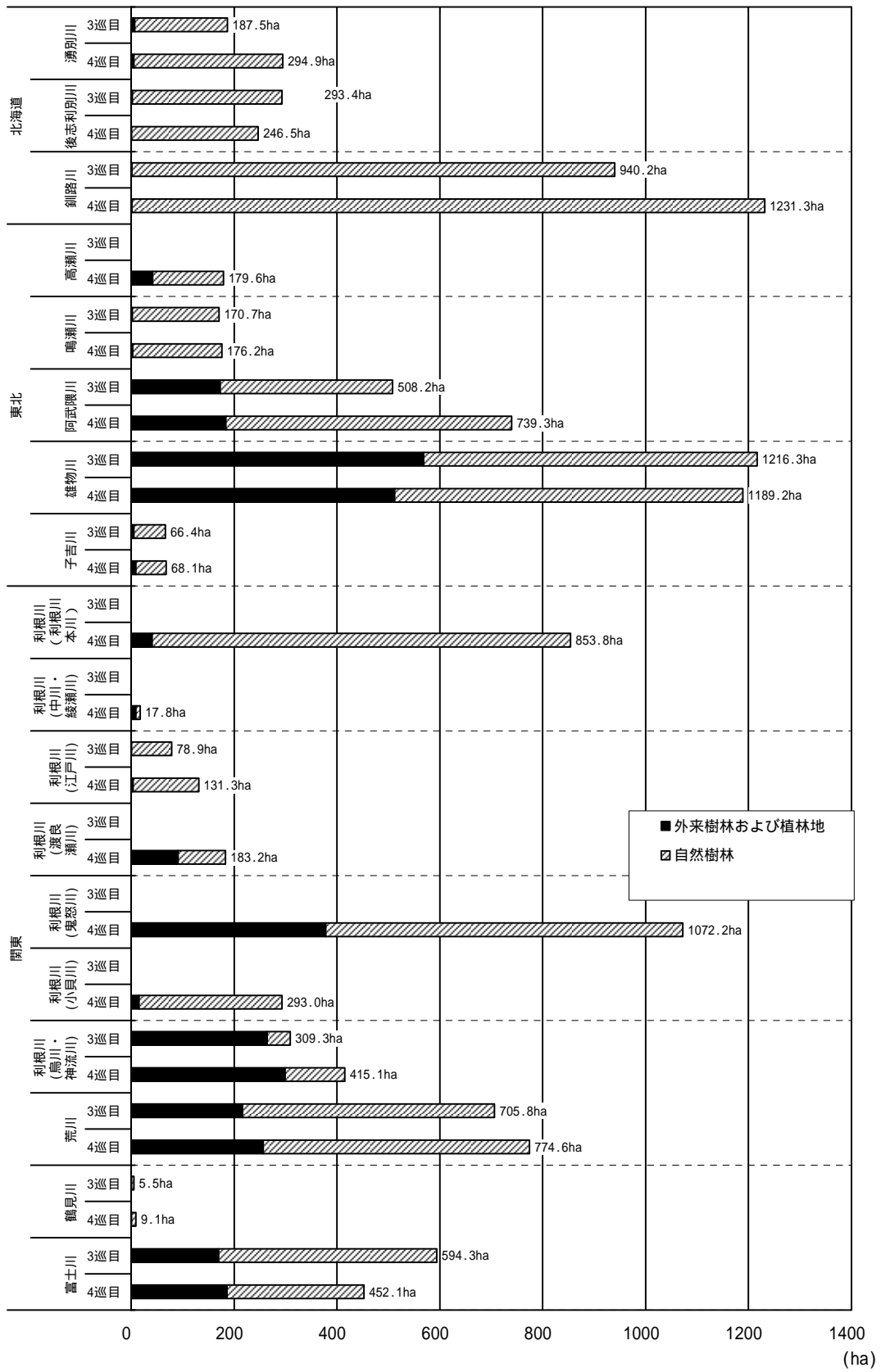
近年、河川敷において植生が著しく繁茂する樹林化の現象が進み、河川管理上の懸案事項となっている箇所が少なくありません。経年比較を行った 25 河川については、13 河川において木本群落の占める割合の増加が確認されました。

ここでは、どのような樹林が増えているのか把握するため、河畔の樹林を自然樹林と外来種樹林および植林地に分類し、それぞれの分布面積を整理しました。自然樹林には、ヤナギ群落やハンノキ群落、カワラハンノキ群落、ムクノキ - エノキ群集、ヤチダモ - ハルニレ群集など本来日本の河川敷に生育する樹林、外来種樹林および植林地には、クロバナエンジュ群落やハリエンジュ群落やスギ・ヒノキ植林など、本来の日本の河川敷にはなかった樹林が含まれます。

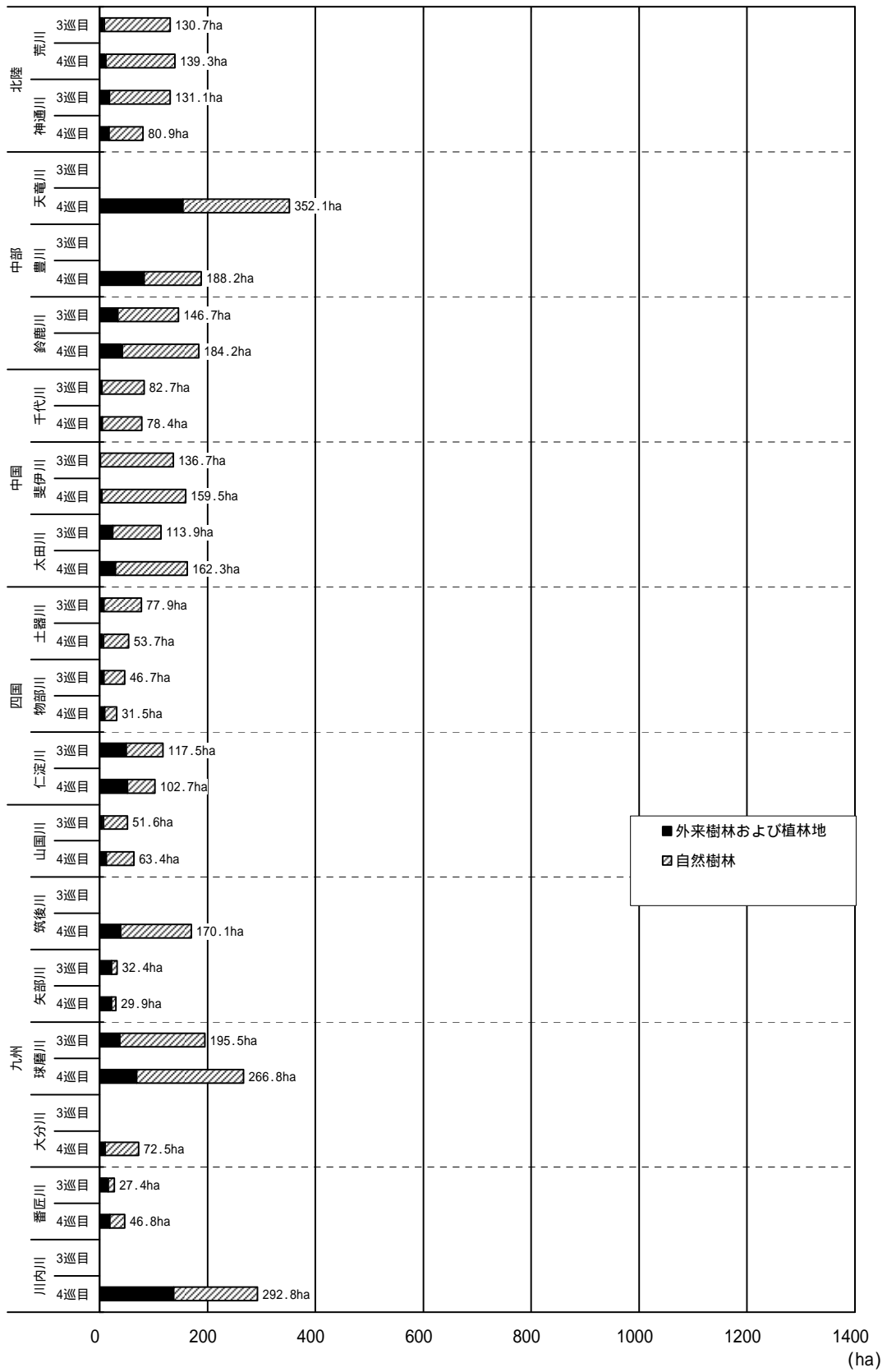
前回調査(3 巡目)から今回調査(4 巡目)にかけての変遷を 25 河川について比較すると、自然樹林と外来種樹林および植林地の構成比が共に増加したのは、中部地方の鈴鹿川や関東地方の利根川(烏川・神流川)など 11 河川でした。また、樹林化の傾向がみられた 13 河川のうち、11 河川で自然樹林と外来種樹林および植林地の両方で、増加の傾向がみられました。

河川敷の樹林化には、自然樹林と外来種樹林および植林地の両方が寄与していることが伺われます。今後の樹林化の傾向についてモニタリングを継続することが必要です。

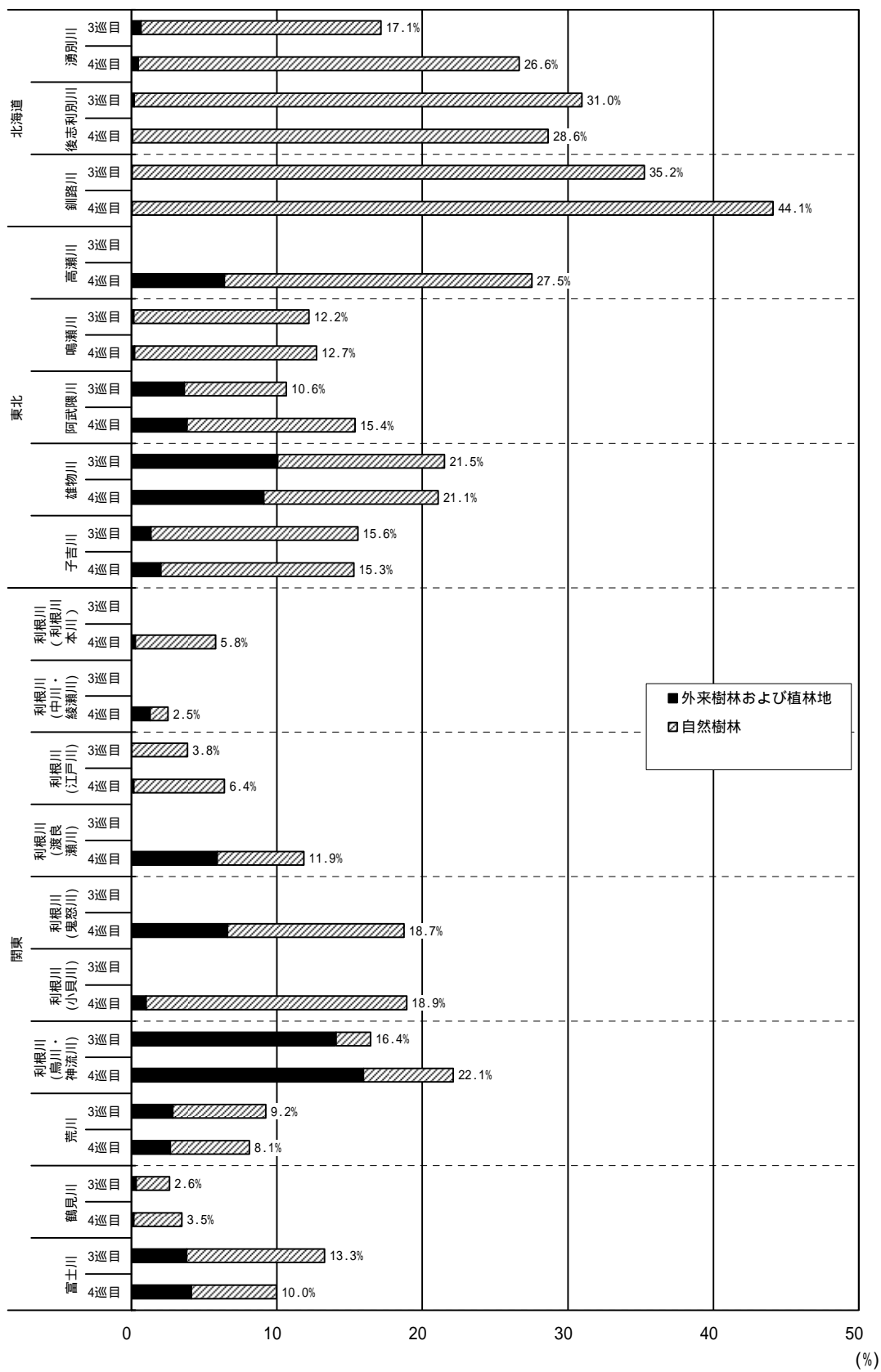
:調査対象面積とは、植生図作成調査における調査対象範囲の面積を示す。なお、前回調査(3 巡目)から今回調査(4 巡目)にかけての変遷をみるにあたり、一部、水系ごとに年度間でとりまとめ対象河川及びその範囲(距離)の調整を図っている。



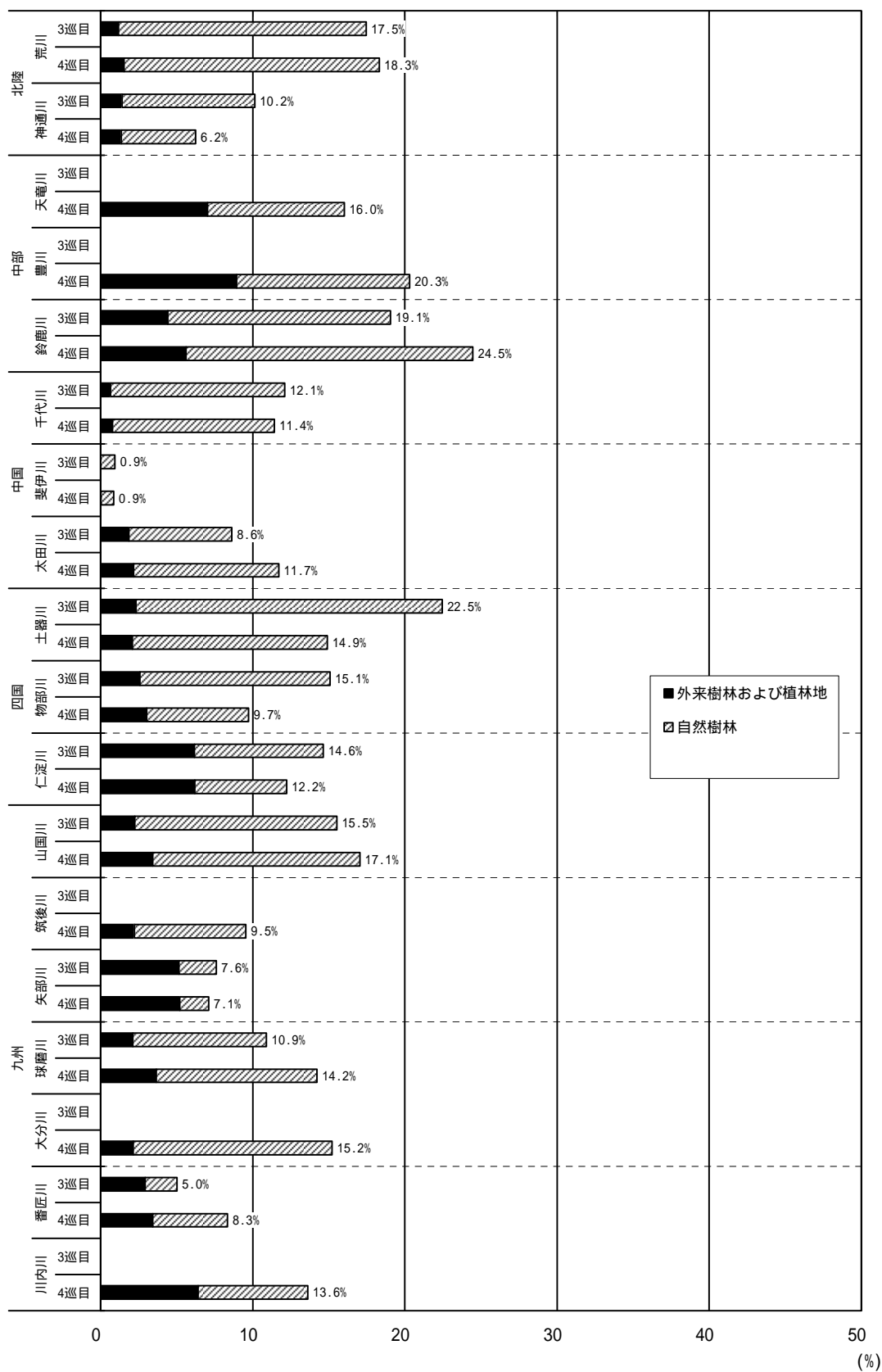
自然樹林の分布面積の変遷(ha)



自然樹林の分布面積の変遷(ha)



自然樹林の分布面積の変遷(%)



自然樹林の分布面積の変遷(%)

- **砂礫河原に生育するカワラヨモギ - カワラハハコ群落**が 10 河川中 5 河川で増加傾向
砂礫河原の指標となる、カワラヨモギ - カワラハハコ群落の分布面積を整理しました。
今回とりまとめを行った 36 河川では、カワラヨモギ - カワラハハコ群落は 12 河川で確認されました。

カワラヨモギ - カワラハハコ群落が確認された河川のうち 10 河川について経年比較すると、東北地方の雄物川など 5 河川で調査対象面積に対する構成比の増加傾向がみられ、北陸地方の神通川など 4 河川で、調査対象面積に対する構成比の減少傾向がみられました。

(資料掲載: 3-59 ~ 3-62ページ)

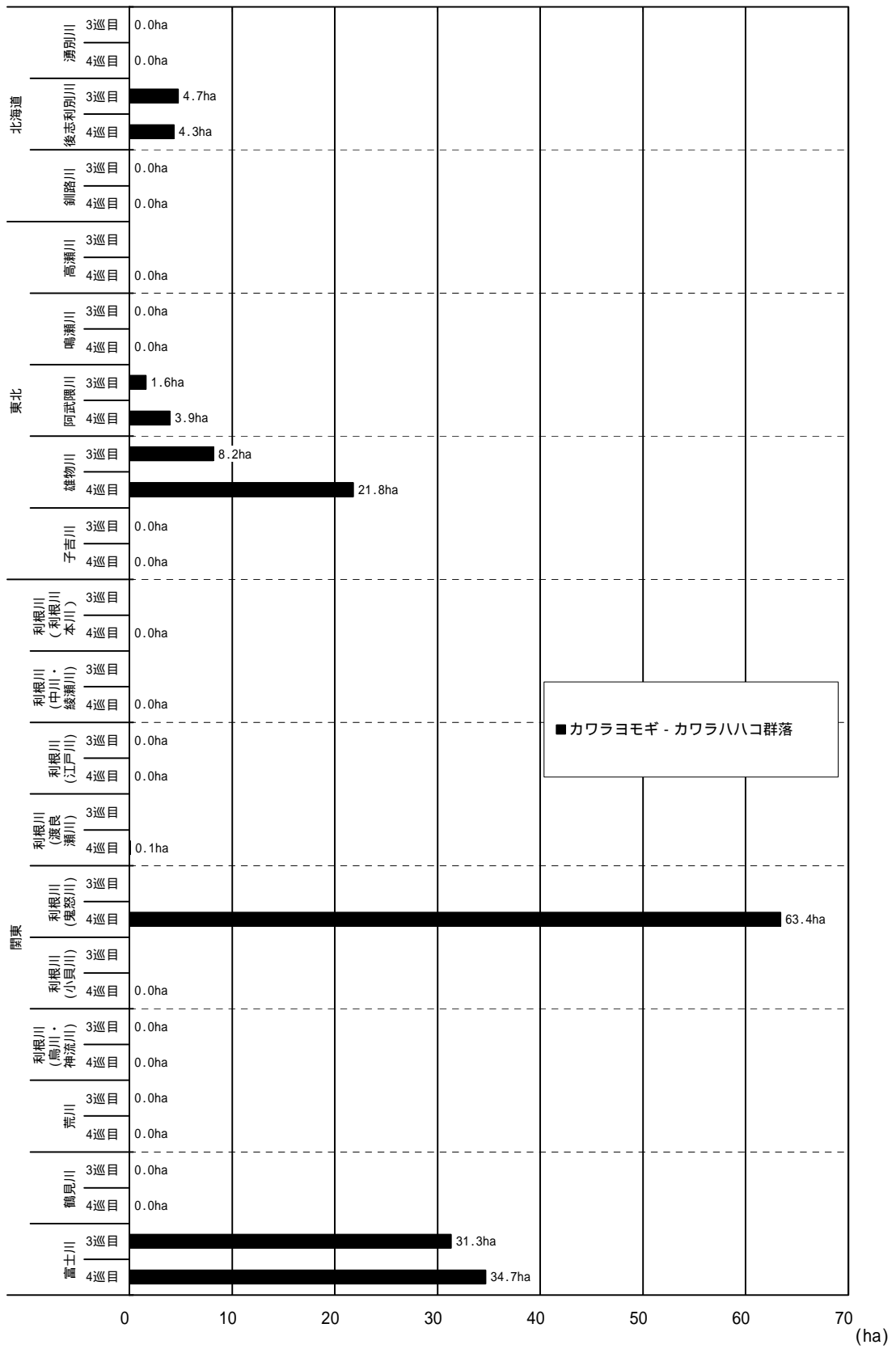
カワラヨモギとカワラハハコは砂礫のある河原に生育するキク科の多年草です。カワラヨモギは本州から沖縄にかけて分布し、カワラハハコは北海道から九州にかけて分布しています。どちらも平時は乾燥し、洪水時には冠水し攪乱を受ける場所に生育するのが特徴です。砂礫河原に生育する植物には、攪乱頻度の減少等により絶滅が危惧される種なども含まれるため、河川環境の特性を把握するための重要な要素の一つであると考えられます。

ここでは、砂礫河原の指標となる、カワラヨモギ - カワラハハコ群落の分布面積を整理しました。

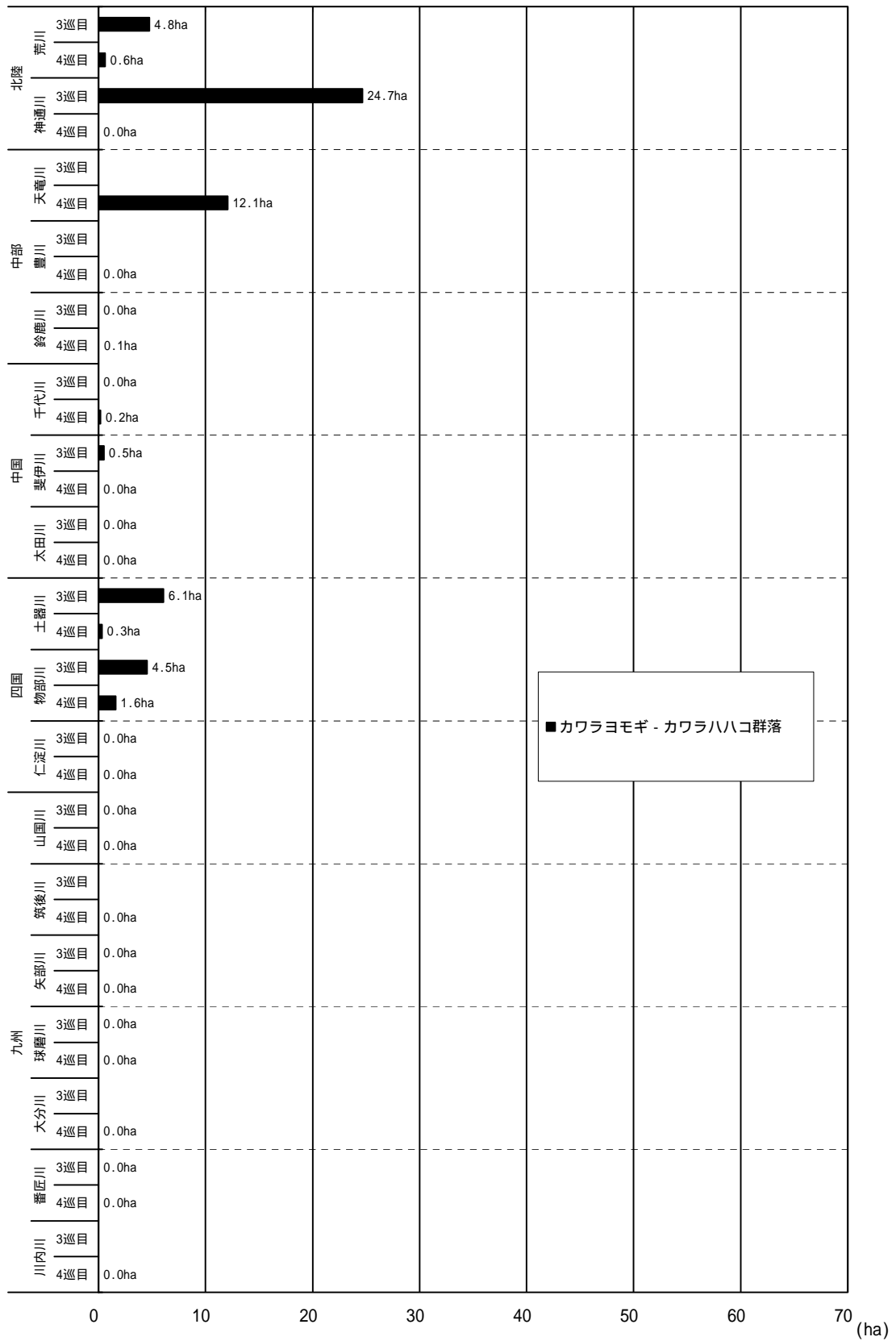
今回とりまとめを行った 36 河川では、カワラヨモギ - カワラハハコ群落は 12 河川でみられ、九州地方では確認されませんでした。調査対象面積 に対する構成比が最も高い値を示した河川は、関東地方の利根川（鬼怒川）で、1.1%でした。

前回調査（3 巡目）から今回調査（4 巡目）にかけての変遷を、カワラヨモギ - カワラハハコ群落が確認された河川のうち 10 河川について比較すると、東北地方の雄物川など 5 河川で調査対象面積に対する構成比の増加傾向がみられ、北陸地方の神通川など 4 河川で、調査対象面積に対する構成比の減少傾向がみられました。

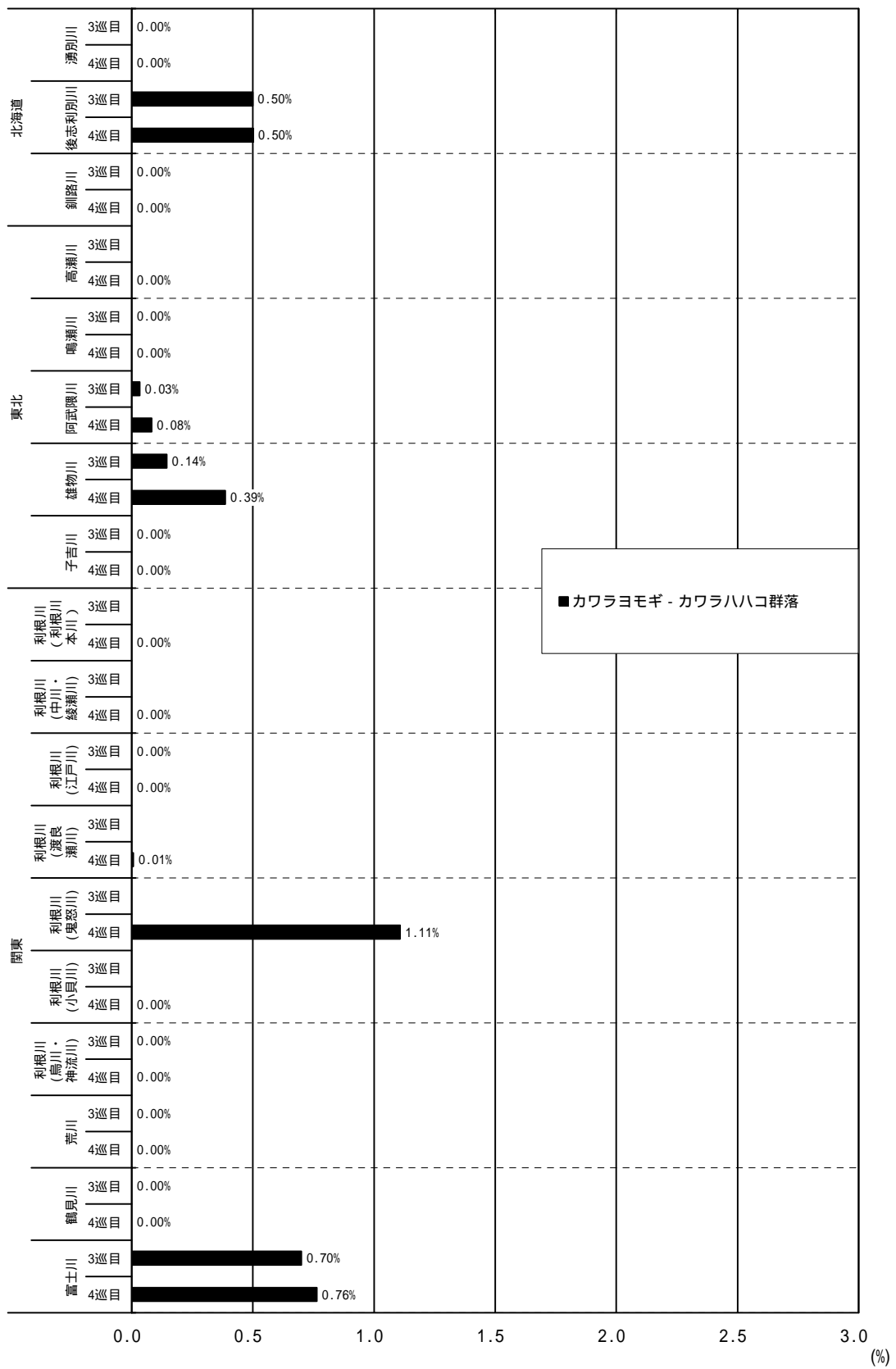
:調査対象面積とは、植生図作成調査における調査対象範囲の面積を示す。なお、前回調査（3 巡目）から今回調査（4 巡目）にかけての変遷をみるにあたり、一部、水系ごとに年度間でとりまとめ対象河川及びその範囲（距離）の調整を図っている。



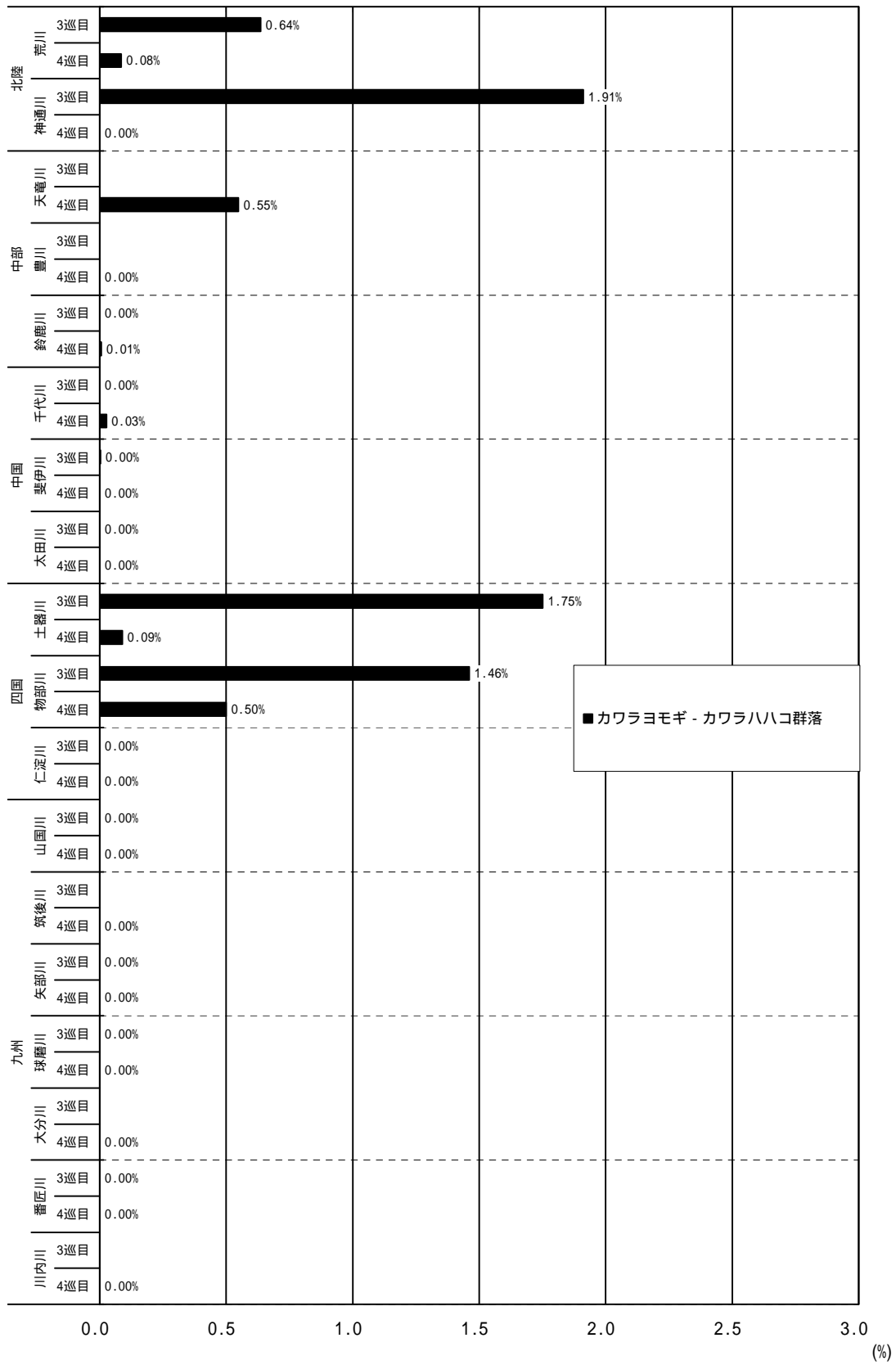
砂礫河原に生育する植物群落の分布面積の変遷(ha)



砂礫河原に生育する植物群落の分布面積の変遷(ha)



砂礫河原に生育する植物群落の分布面積の変遷(%)



砂礫河原に生育する植物群落の分布面積の変遷(%)

- 河口域の塩性湿地に生育するシオクグ群集、アイアシ群集が 11 河川中 7 河川で増加傾向

河口域の塩性湿地の指標となる、シオクグ群集、アイアシ群集の分布面積を整理しました。

今回とりまとめを行った 36 河川のうち、シオクグ群集、アイアシ群集が確認された河川は、中部地方の鈴鹿川、九州地方の筑後川や矢部川などの 14 河川でした。

シオクグ群集とアイアシ群集が確認された河川のうち 11 河川について経年比較すると、中部地方の鈴鹿川や関東地方の利根川（江戸川）など 7 河川において、調査対象面積に対する構成比の増加傾向がみられました。また、九州地方の矢部川など 2 河川で減少傾向がみられました。

(資料掲載: 3-64 ~ 3-67ページ)

シオクグ (カヤツリグサ科) とアイアシ (イネ科) は、河口干潟や塩性湿地に生育する多年草です。シオクグは北海道から沖縄にかけて分布し、アイアシは北海道から九州にかけて分布しています。このような塩性湿地に生育する植物群落は、河口域の汽水環境を把握するための重要な要素の一つと考えられます。

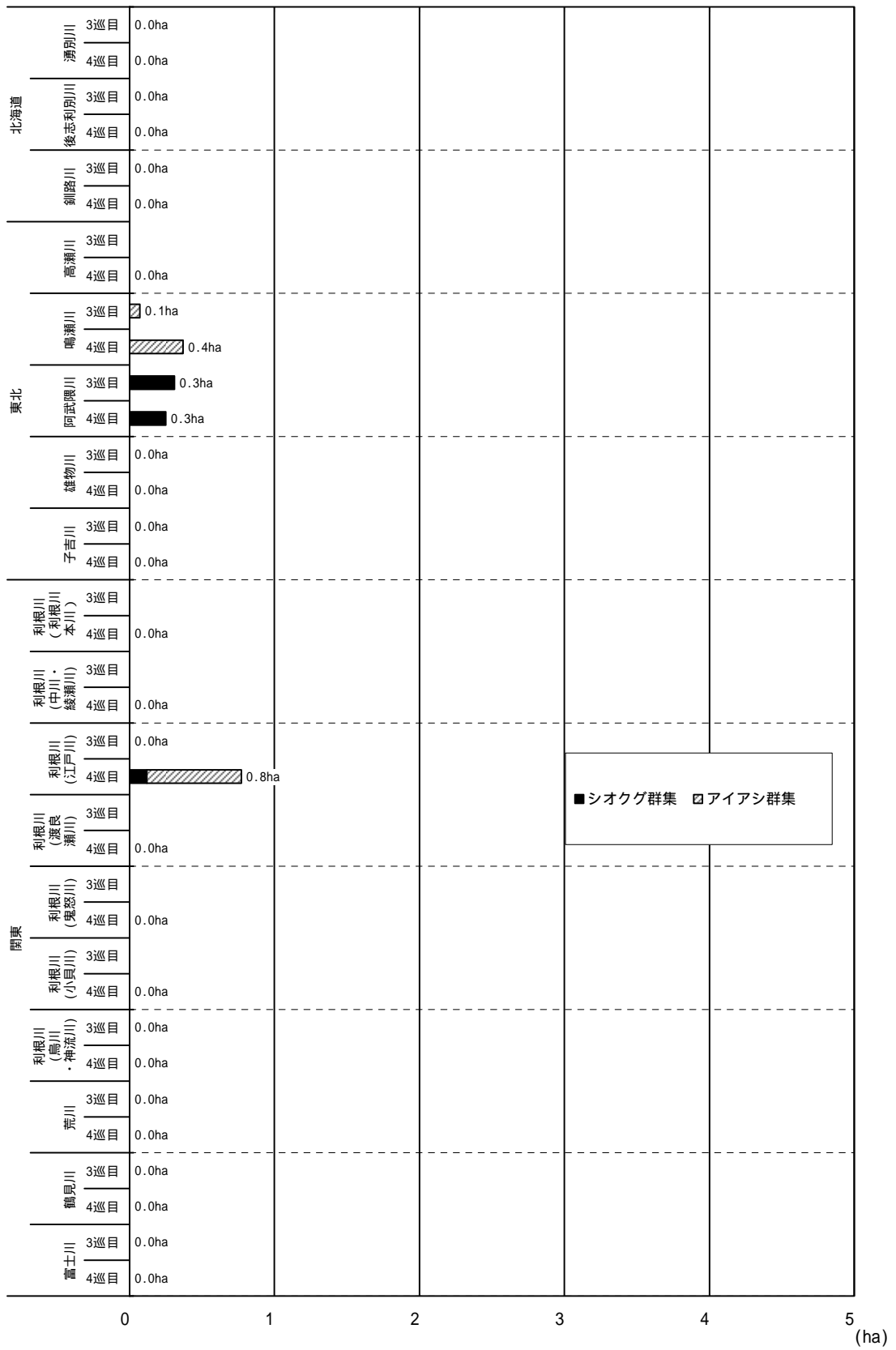
ここでは、河口域の塩性湿地の指標となる、シオクグ群集、アイアシ群集の分布面積を整理しました。

今回とりまとめを行った 36 河川のうち、シオクグ群集、アイアシ群集が確認された河川は、中部地方の鈴鹿川、九州地方の筑後川や矢部川などの 14 河川でした。このうち、調査対象面積に対する構成比が最も高い値を示した河川は、九州地方の矢部川で、0.6%でした。

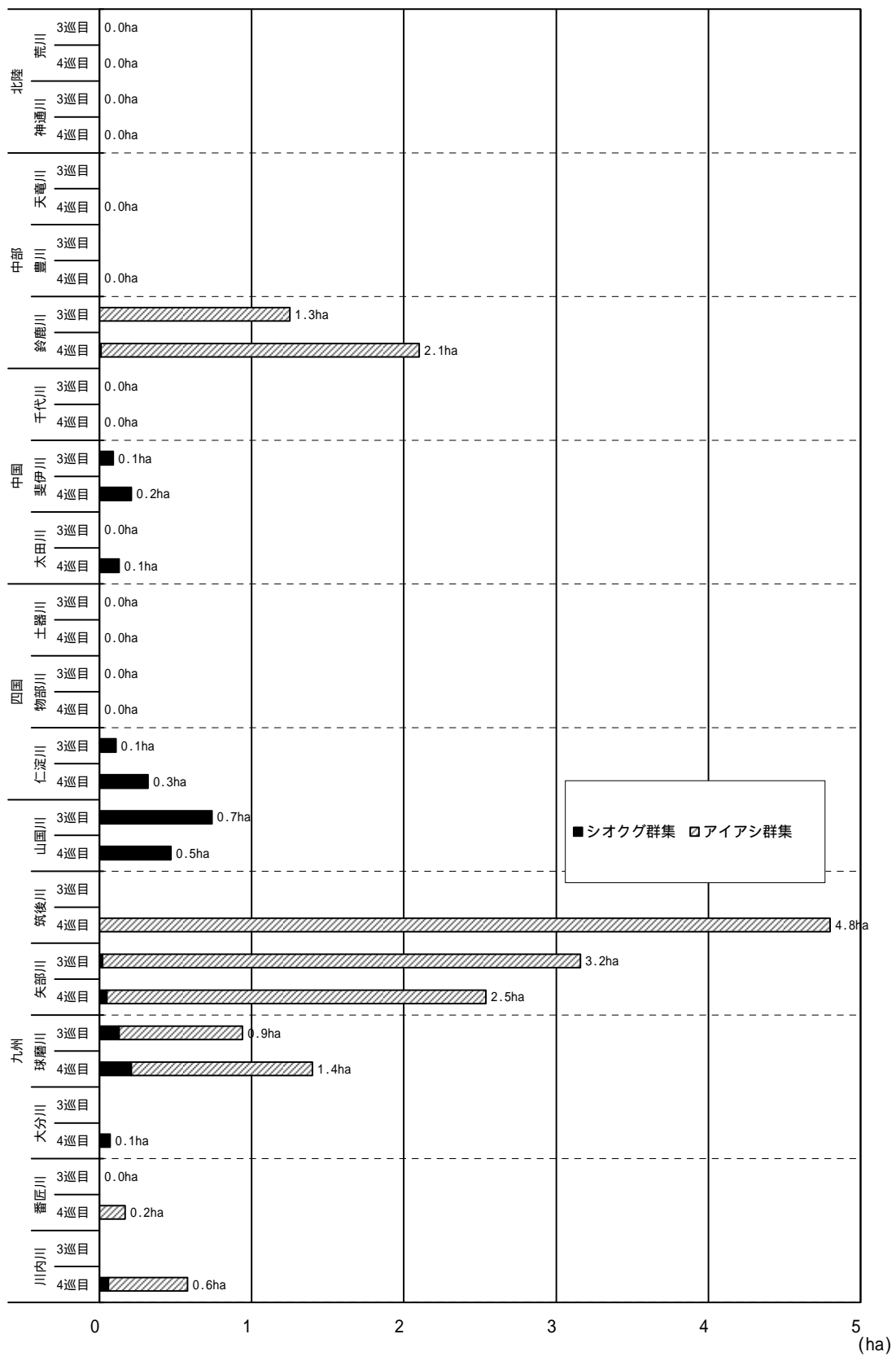
前回調査 (3 巡目) から今回調査 (4 巡目) にかけての変遷を、シオクグ群集とアイアシ群集が確認された河川のうち 11 河川について比較すると、中部地方の鈴鹿川や関東地方の利根川 (江戸川) など 7 河川において、調査対象面積に対する構成比の増加傾向がみられました。また、九州地方の矢部川など 2 河川で減少傾向がみられました。

:調査対象面積とは、植生図作成調査における調査対象範囲の面積を示す。なお、前回調査 (3 巡目) から今回調査 (4 巡目) にかけての変遷をみるにあたり、一部、水系ごとに年度間でとりまとめ対象河川及びその範囲 (距離) の調整を図っている。

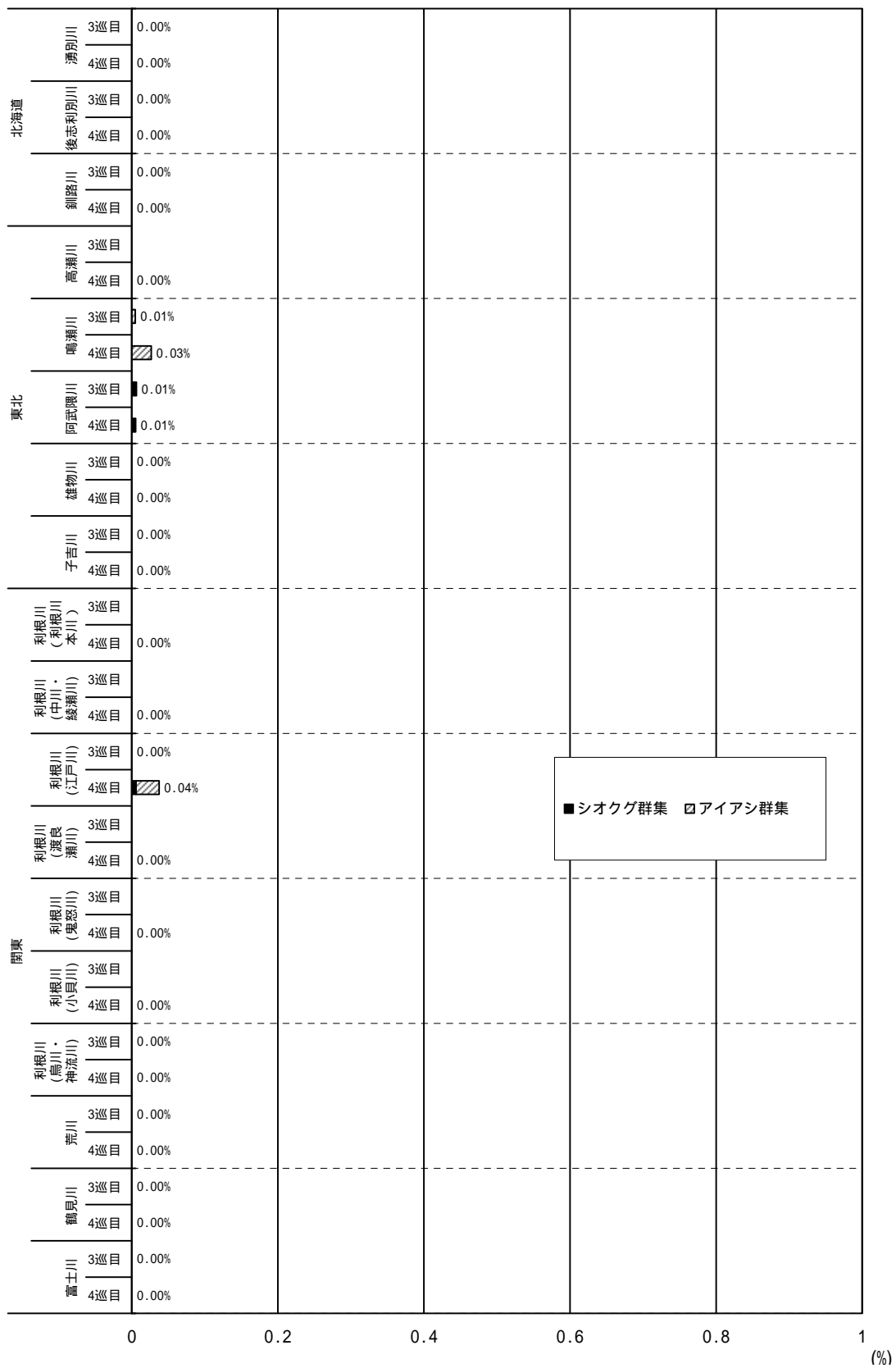
:多摩川 (H6) ではシオクグ群集とアイアシ群集を示すデータが一つにまとめられているため、シオクグ群集として集計した。



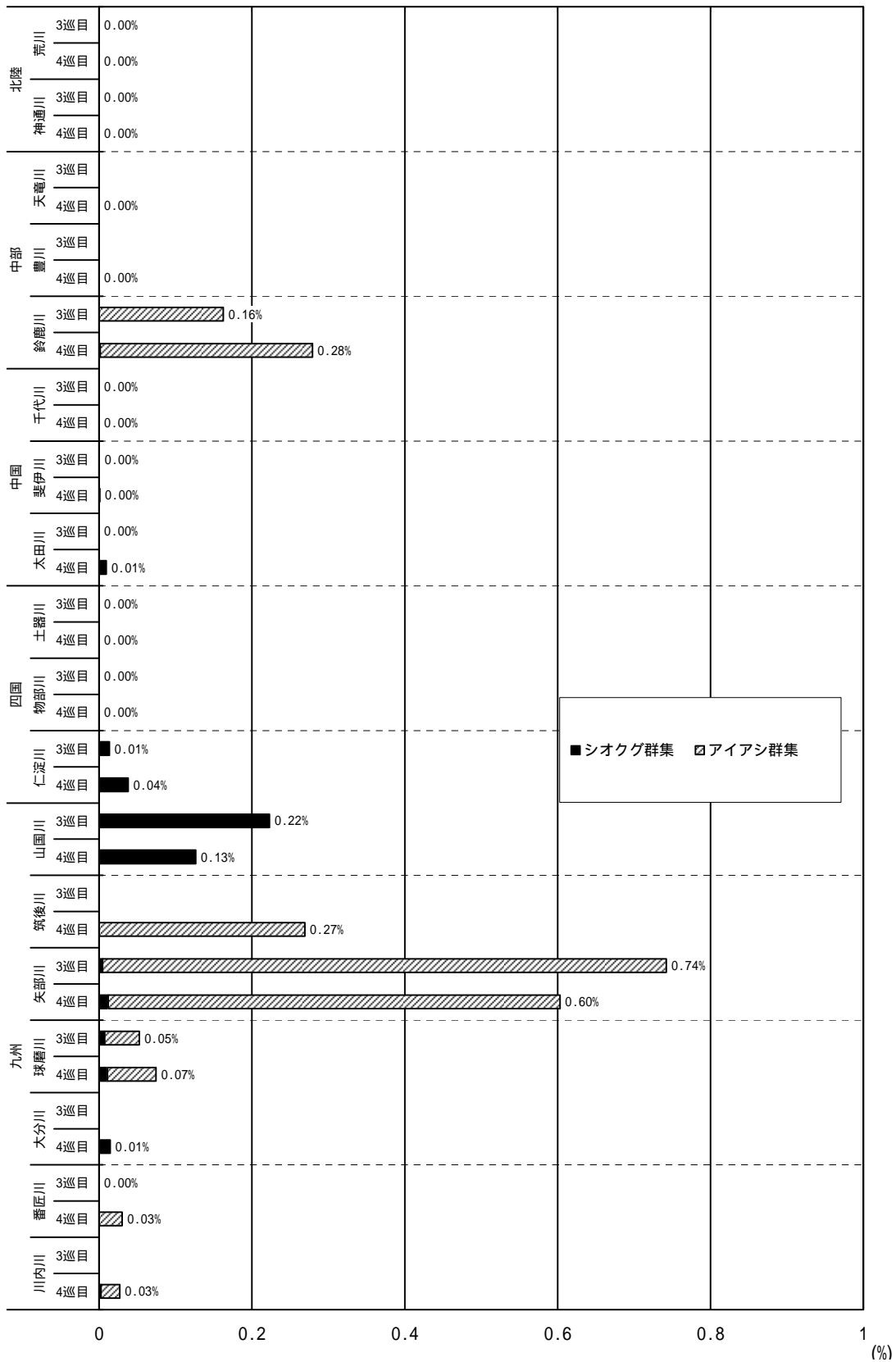
河口域の塩性湿地に生育する植物群落の分布面積の変遷(ha)



河口域の塩性湿地に生育する植物群落の分布面積の変遷(ha)



河口域の塩性湿地に生育する植物群落の分布面積の変遷(%)



河口域の塩性湿地に生育する植物群落の分布面積の変遷(%)

- **水辺の植物群落が富士川など 12 河川で増加傾向、太田川など 13 河川で減少傾向**
水辺の植物群落の指標として、ヨシ群落、オギ群落、ツルヨシ群集の分布面積を整理しました。

今回とりまとめを行った 36 河川では、水辺の植物群落の調査対象面積に対する構成比が最も高い値を示した河川は、北海道地方の釧路川で、26.1%でした。最も低い値を示した河川は、北海道地方の湧別川で、0.3%でした。

前回（3 巡目）調査から今回（4 巡目）調査にかけての変遷を 25 河川についてみると、関東地方の富士川など 12 河川でこれらの構成比の増加傾向がみられました。また、中国地方の太田川など 13 河川で減少傾向がみられました。

(資料掲載: 3-69 ~ 3-72ページ)

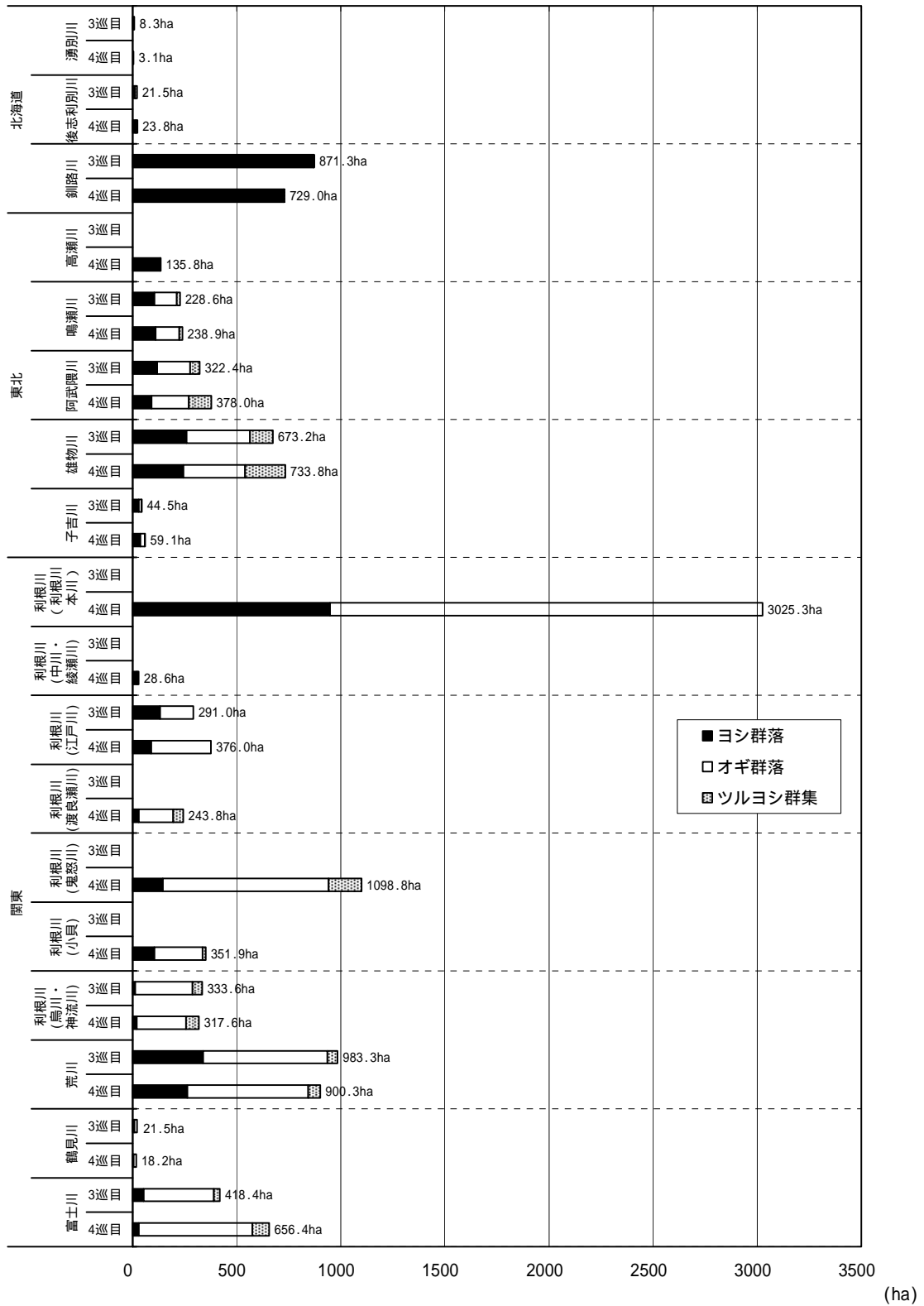
ヨシ、オギ、ツルヨシは、比較的地下水位の高い場所に生育し、河川区域で広くみられるイネ科の多年草です。ヨシとオギは水辺の湿地などに生育し、ツルヨシは川岸や砂礫地などに生育します。ヨシとツルヨシは北海道から沖縄にかけて、オギは北海道から九州にかけて分布しています。このような水辺の植物群落は、河川景観を特徴づける他、昆虫類の食草となったり、オオヨシキリなどの鳥類やカヤネズミの営巣の場として利用されるなど、水辺の動物の生息環境として重要な要素の一つであると考えられます。

ここでは、水辺の植物群落の指標として、ヨシ群落、オギ群落、ツルヨシ群集の分布面積を整理しました。

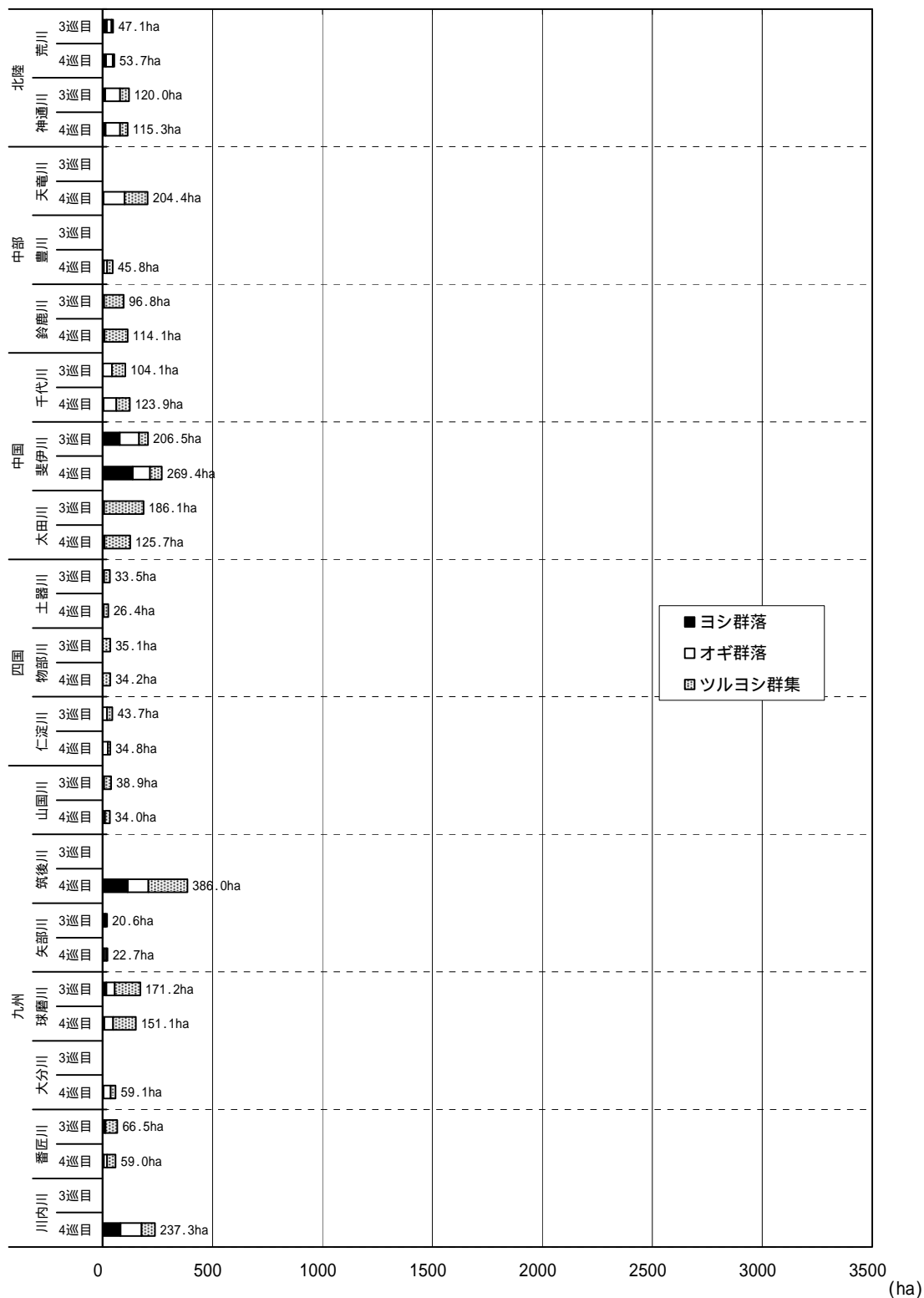
今回とりまとめを行った 36 河川では、水辺の植物群落の調査対象面積 に対する構成比が最も高い値を示した河川は、北海道地方の釧路川で、26.1%でした。最も低い値を示した河川は、北海道地方の湧別川で、0.3%でした。

前回調査（3 巡目）から今回調査（4 巡目）にかけての変遷を 25 河川について比較すると、関東地方の富士川など 12 河川でこれらの構成比の増加傾向がみられました。また、中国地方の太田川など 13 河川で減少傾向がみられました。

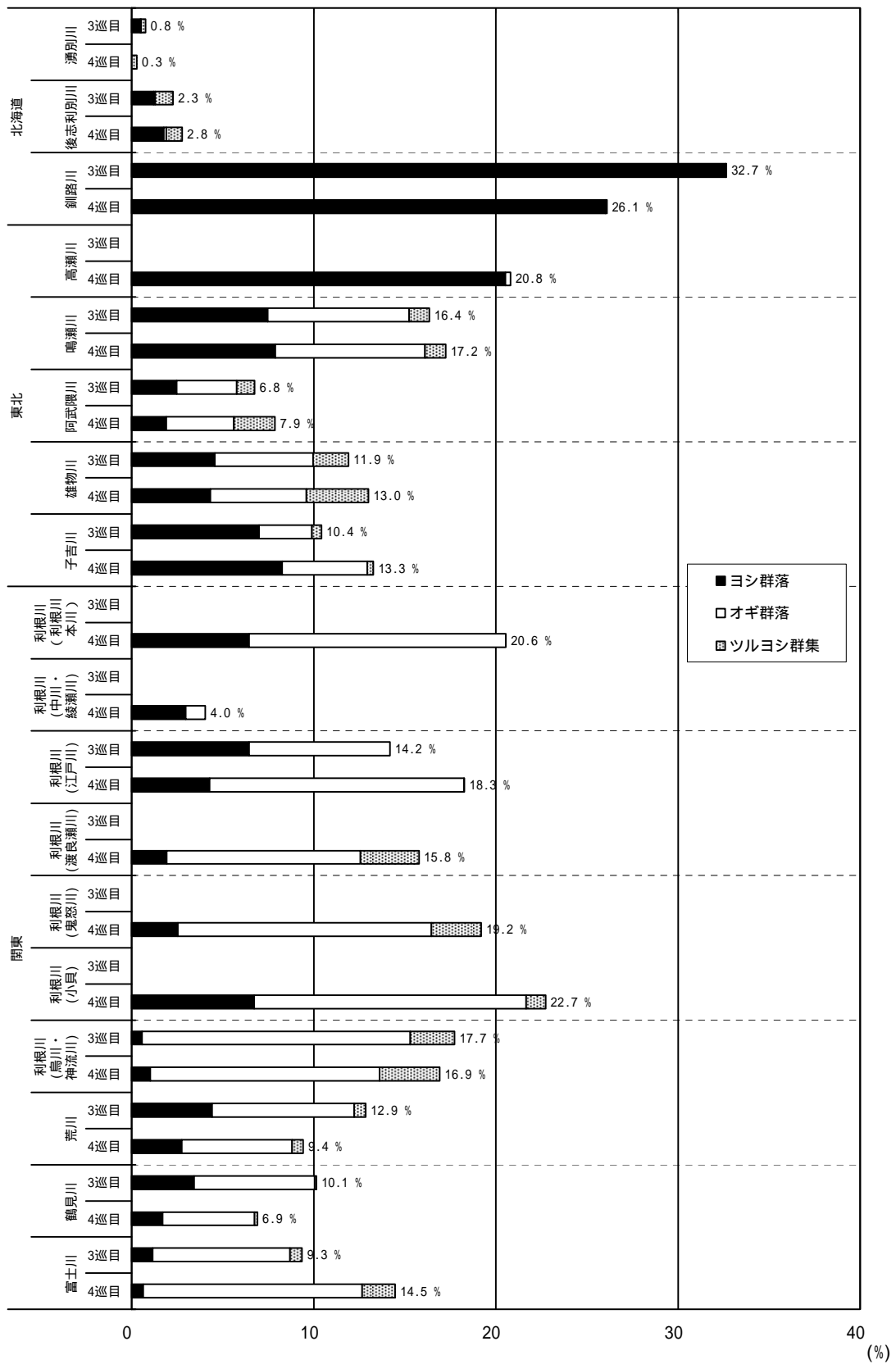
:調査対象面積とは、植生図作成調査における調査対象範囲の面積を示す。なお、前回調査（3 巡目）から今回調査（4 巡目）にかけての変遷をみるにあたり、一部、水系ごとに年度間でとりまとめ対象河川及びその範囲（距離）の調整を図っている。



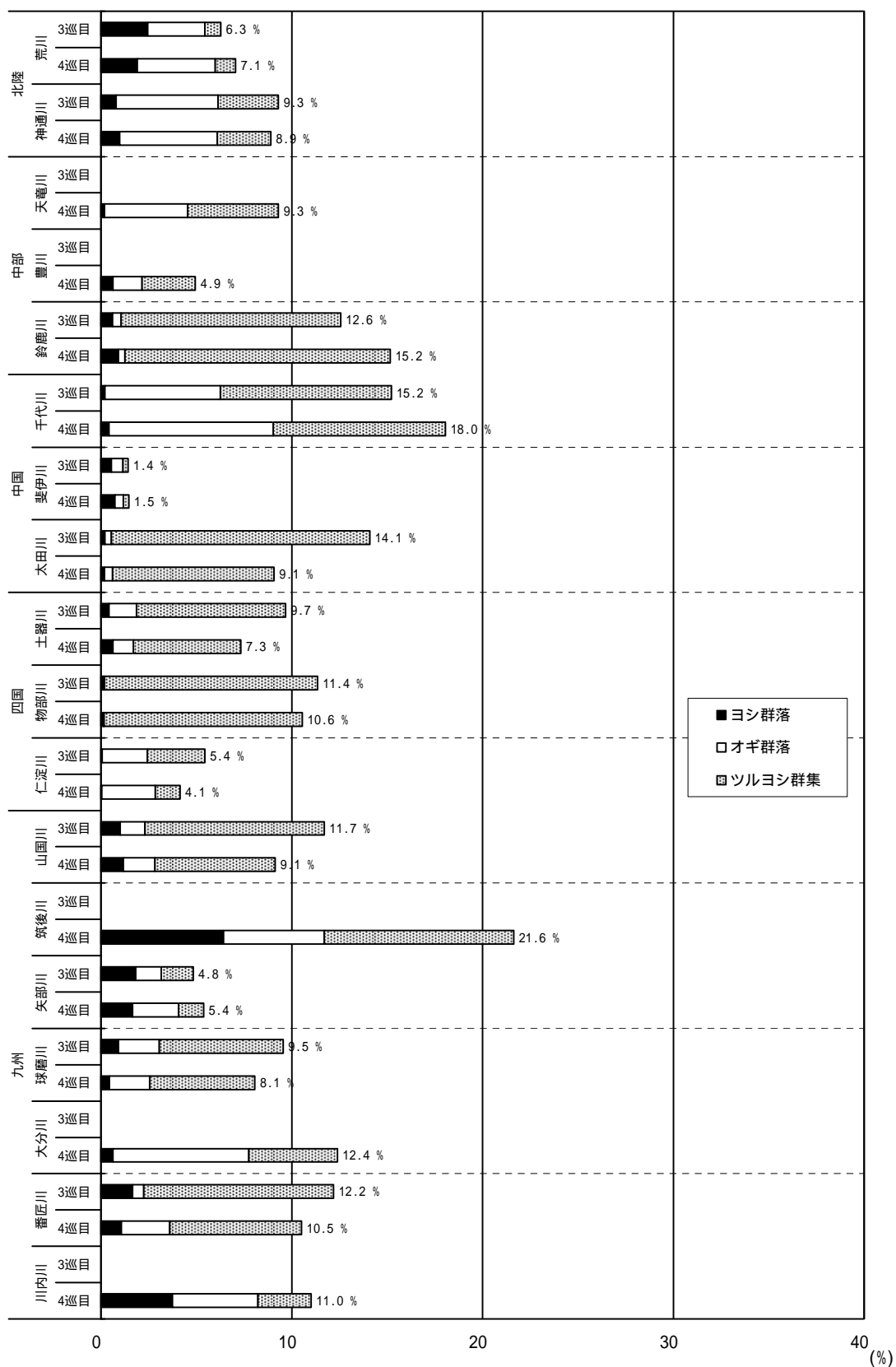
水辺の植物群落の分布面積の変遷(ha)



水辺の植物群落の分布面積の変遷(ha)



水辺の植物群落の分布面積の変遷(%)



水辺の植物群落の分布面積の変遷(%)